

(7) 音楽と能楽

加藤の音楽の出会いは、祖父の蓄音機から流れる歌劇の詠唱と母の奏でる琴の音から始まる。小学生のときに『船頭小唄』や『枯れすすき』といった歌謡を知った。西洋の古典音楽を知るのは第一高等学校時代のことだろう。音楽好きの学友とともに、東京の大きな町にあったいわゆる名曲喫茶で、西洋古典音楽を聴いた。加藤が好きだったのは、ベートーヴェンやショパンといったロマン派の音楽、ことにピアノ曲だった。

実際の演奏会に出かけるようになるのは、大学に入ってからのものである。『青春ノート』には、しばしば演奏会のことが綴られる。加藤が音楽界に出かけて、その感想をノートに記した最初は、レオニード・クロイツァーのピアノ演奏会である。その後、ローゼンストックの指揮する新響の演奏会、草間（安川）加壽子、井口基成、豊増昇といったピアニストたちの演奏会である。ここからも加藤の好みはロマン派のピアノ音楽であったことが分かる。



(写真：左からレオニード・クロイツァー、金剛巖、梅若万三郎)

日本の古典芸能では、すでに高等学校時代に歌舞伎座的一幕見に通ったことは述べた。

しかし、能楽は高等学校時代には観ていなかった。能楽を観るきっかけは、中村真一郎の親類で、鉄工所の経営者が、その息子の出征の「壮行会」で、能楽を観ることを加藤に勧めたのであった。加藤はそれ以来、水道橋の能楽堂をはじめとし、都内にいくつもあった能楽堂に通う。こうして梅若万三郎の謡や金剛巖の舞を知って、強い感動を与えられたのである。

能楽を観る習慣は、戦争末期に身に付いたのだが、加藤がしばしば能楽堂に足を運んだのは、能楽の特徴と深くかかわっていたに違いない。能楽のうち「夢幻能」と呼ばれる演目は、「彼岸の世界」と「此岸の世界」とが描かれる。そういう能楽の世界に惹かれたのは、万三郎や巖の芸の高い水準ばかりではなく、加藤が「生きる世界」が「死の世界」と背中合わせに結びついていたという、当時の時代状況と大いに関係しているに違いない。能楽の世界に、自分自身のあり得る可能性を投影させていたからにほかならない。